

「薩摩磁器」生産の終焉をめぐる

渡辺 芳郎

(鹿児島大学法文学部)

はじめに

日本における磁器生産は、1610年代、肥前地方（現在の佐賀・長崎県）に始まり、17世紀後半の明清動乱による中国磁器輸出の急減にともない、肥前磁器は日本の磁器市場を寡占する。しかし18世紀後半以後、全国各地に新興の磁器窯が多数出現し、肥前磁器のシェアを蚕食していく。九州～西日本では肥後天草陶石の流通により、多くの磁器窯場が勃興する。薩摩藩においても、天草陶石を用いた平佐焼（薩摩川内市）、苗代川南京皿山窯（日置市美山）、日木山窯（始良市加治木町）などが操業しているが、これらの多くは、明治を迎えるとともに衰退または閉窯していく。その終焉の状況については、これまで十分に検討されることがなく、現段階においても、明確な閉窯年代が不明な窯場もある。しかし窯業地の衰退・終焉の具体相を把握することは、窯業地の歴史の全体像を理解する上で不可欠であると考え、本稿ではその理解のための整理を行いたい。

なお「薩摩磁器」という用語は、近世薩摩藩内で生産された磁器の総称であり〔渡辺 2006a〕、藩がなくなった明治以後に用いることは、必ずしも適切ではない。しかし本稿で扱う磁器窯場は、いずれも近世段階にその初源を有し、近世から近代への変革とともに衰退・消滅した窯場である。つまりその衰退・消滅の過程は「近世的磁器生産」の終焉を意味していよう。それゆえ本稿ではあえて「薩摩磁器」の名称を使用したい。

I. 平佐焼

平佐焼は安永7・8年（1778・79）頃に開窯し、近世の窯跡として北郷窯跡（18世紀第4四半期～末）、大窯跡（18世紀末～明治初頭）、新窯跡（幕末・

明治初頭）が確認されている。北郷窯跡は未発掘であるが、最初に開かれた窯と推測され、大窯跡・新窯跡からはコバルト染付が出土していないことから、その導入以前には閉窯したと考えられる。平佐焼におけるコバルト導入は明治10年以前と推測されている〔福菌 2009〕。以下、とくに断らない限り、平佐焼に関する記述は渡辺 2007 による。

明治以後の平佐焼の窯跡としては現窯跡・柚木崎窯跡・永井窯跡・勝目窯跡・向井窯跡が確認されている（図1）。これらの窯はいずれも個人経営であったという〔田澤・小山 1941：203頁〕。現窯は近世平佐焼の中心的存在であった大窯の南方に近接して所在し、またその構築材の一部に、大窯で使用されていた「平」印を施したトンバイを再利用していることから、大窯の後継窯として建造されたと推測される。それに対して柚木崎・永井・勝目・向井窯は、大窯一現窯所在地を中心とすると、いずれも周縁部に位置する。また永井・勝目・向井窯は、各窯経営者の住宅の近傍に建造されている。このような近代における個人窯の成立は苗代川（日置市美山）などにおいても見られ、近世か

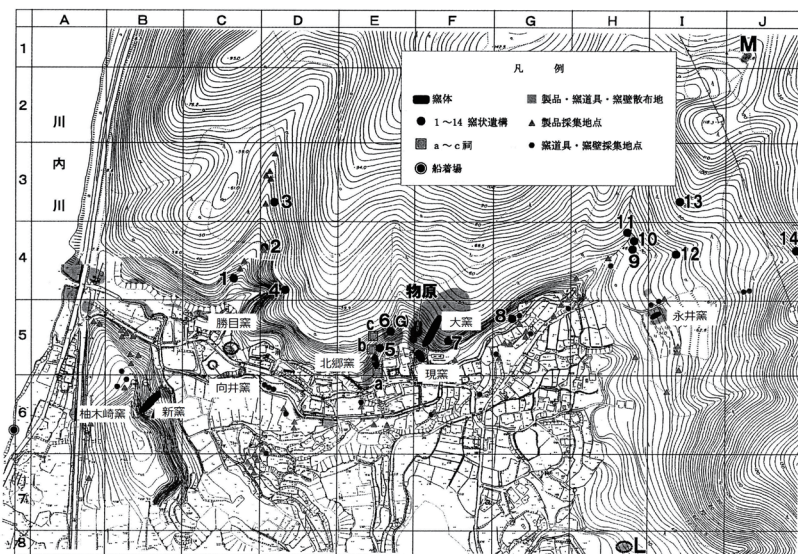


図1 平佐焼窯跡群窯跡分布図（渡辺 2007 より一部改変）



図2 平佐焼現窯跡（筆者撮影）

ら近代にかけての大きな変化のひとつと言えよう。

これら近代平佐焼窯の開窯・閉窯年代については、いくつかの文献に伝わっている。

柚木崎窯：開窯を明治8・9年（1875・76）とする文献（「沿革」「由緒」など¹⁾）と明治11年とする文献〔農務局工務局1886、大日本窯業協会編1914、前田1934、岩満1967など〕がある。また後者の場合、窯そのものは明治7年に田中徳兵衛〔前田1934、岩満1967〕あるいは中西十太郎〔農務局工務局1886、大日本窯業協会編1914〕によって開かれ、11年に柚木崎六兵衛が継承したとされている。明治18年の薩

糸織物陶器漆器共進会に「柚木崎六兵衛」が出品しているの〔川内市歴史資料館編2000：19-21頁〕、この時点で彼が窯を操業していたことは確実と言える。閉窯年代については明らかでないが、柚木崎窯跡の窯体は、大正3年（1914）から始まった川宮鉄道建設（のちの国鉄宮之城線、昭和62年（1987）廃線）によって寸断されていることから、この工事にともない閉窯したとも考えられる〔渡辺2007：12頁〕。一方、昭和9年（1934）に本窯跡を踏査した田澤金吾・小山富士夫らによれば、当時は「休窯状態」であったという〔田澤・小山1941：203頁〕。

勝目窯：明治8・9年開窯とされており（「沿革」「由緒」）、野元1984では9年としている。正確な年代は判じたいが、明治9年頃には操業していたと考えられる。閉窯年代は不明であるが、やはり昭和9年段階には「休窯」していた。平佐皿山の現勝目邸の門前に3室の連房式登窯があったと伝えられている。

永井窯：明治16年（1883）、瀬島熊助²⁾に陶法を学んだ永井太左衛門が開窯したという〔農務局工務局1885〕。同じく明治18年の共進会に出品している〔川内市歴史資料館編2000：18頁〕。閉窯年代はやはり不明で、昭和9年段階では「休窯」している。燃焼室

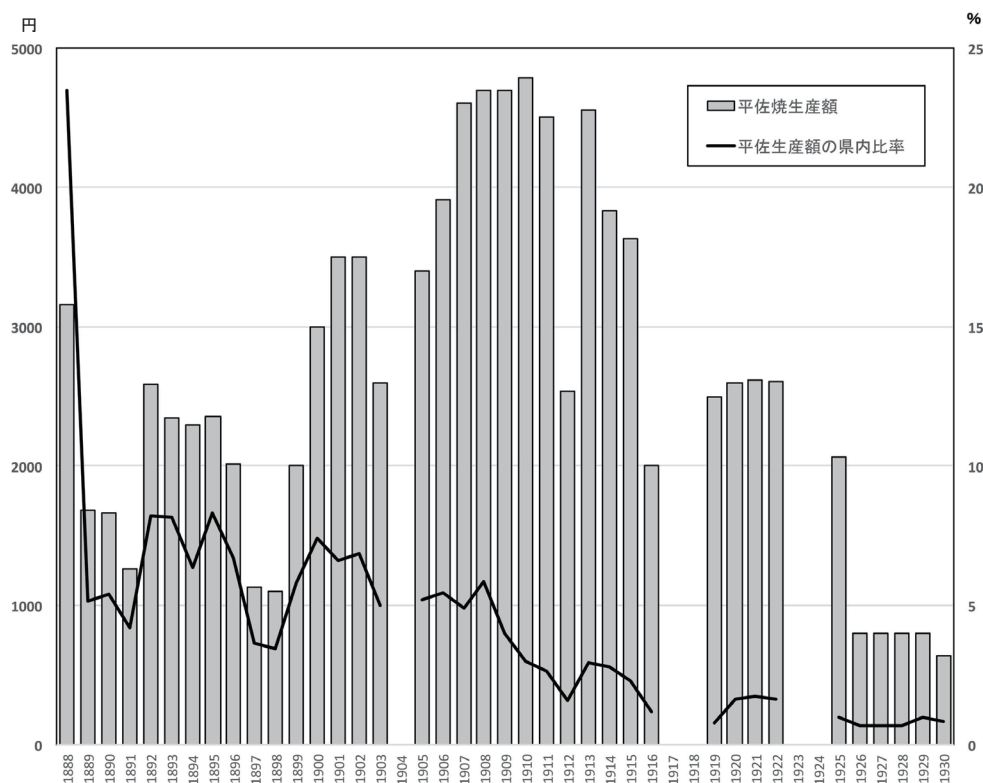


図3 平佐焼生産額とその県内比率の推移現窯跡（『鹿児島県統計書』より）

表 1 平佐焼における製造戸数・職人数・窯数・室数
（『鹿児島県統計書』より）

和暦	西暦	製造戸数	職工数	窯数	室数	錦窯	素焼窯	其他	備考
明治 21 年	1888	3			27				「窯数」とあるが「室数」と判断
明治 22 年	1889								
明治 23 年	1890	9			19				「窯数」とあるが「室数」と判断
明治 24 年	1891	9			19				「窯数」とあるが「室数」と判断
明治 25 年	1892		48		26				「窯数」とあるが「室数」と判断
明治 26 年	1893		24		21				「窯数」とあるが「室数」と判断
明治 27 年	1894		23		21				「窯数」とあるが「室数」と判断
明治 28 年	1895	4	30			1			「窯数 21」「室数 28」で不自然
明治 29 年	1896	4	36	4	21	2			
明治 30 年	1897	4	36	4	21	2			
明治 31 年	1898	4	36	4	22	2			
明治 32 年	1899	6	48	6	26	2			
明治 33 年	1900	6	48	6	26	2			
明治 34 年	1901	6	48	6	26	2			
明治 35 年	1902	5	25	6	26	2			
明治 36 年	1903	4	19	6	26	2			
明治 37 年	1904								
明治 38 年	1905	4	28	6	26				
明治 39 年	1906	4	28	6	26				
明治 40 年	1907	4	28	6	26				
明治 41 年	1908	4	28	6	26				
明治 42 年	1909	3	34	6	26				
明治 43 年	1910	3	30	6	25				
明治 44 年	1911	4	35	2	25				
大正 1 年	1912	4	38	2	25				
大正 2 年	1913	4	39	2	25				
大正 3 年	1914	4	34	2	25				
大正 4 年	1915	4	33	2	25				
大正 5 年	1916	2	9	2	14	2			
大正 6 年	1917								
大正 7 年	1918								
大正 8 年	1919	2	9	2	14			2	
大正 9 年	1920	2	9	2	14			2	
大正 10 年	1921	2	9	2	14			2	
大正 11 年	1922	2	9	2	14			2	
大正 12 年	1923								
大正 13 年	1924								
大正 14 年	1925	1	6	1	8				
昭和 1 年	1926	1	2				1		「窯数 7」「室数 3」で不自然
昭和 2 年	1927	1	2				1		「窯数 7」「室数 3」で不自然
昭和 3 年	1928	1	2				1		「窯数 7」「室数 3」で不自然
昭和 4 年	1929	1	2				1		「窯数 7」「室数 3」で不自然
昭和 5 年	1930	1	2				1		「窯数 7」「室数 3」で不自然

＋ 3 焼成室の連房式登窯跡が残存している。

向井窯：明治 42 年（1909）に向井勘兵衛が開窯し、昭和 16 年（1941）の彼の死去にともない閉窯したとされている〔野元 1984〕。同窯は「勘兵衛焼」とも称される鼈甲焼製品の生産で知られている³⁾。

現窯（図 2）：開窯年代を記した文献は管見に触れていない。しかし先述したように大窯の後継窯と考えられることから、大窯閉窯後の明治初頭には開窯していたと推測される。昭和 9 年には「休窯」で⁴⁾、閉窯年代に関する情報は無い。天井部を残す 2 室の焼成室が残存し、本来は 5 室であったと推測される。

以上のように各窯の開窯年代については、断片的で、やや錯綜しているとは言え、なんらかの手がかりがあるのに対し、閉窯年代については、向井窯をのぞくと、さらに情報が少ないのが現状である。

平佐焼全体における生産停止の年代については、昭和元年（1926）とするもの〔前田 1934、川内郷土誌編さん委員会編 1976〕と、昭和 16 年とするもの〔岩満 1967、向田 1978、野元 1982 など〕がある。『川内市史』によれば、昭和元年に「最後の窯入れ」を行ったのちに、

昭和 7 年から 12 年までの間、浜田豊吉と寺田健吉が、岩月直彦の出資を得て、平佐焼合資会社を設立、一窯約 300 円の生産高で、鹿児島市方面に出荷していたという〔川内郷土誌編さん委員会編 1976：927 頁〕。また先述したように、昭和 9 年には現窯・柚木崎窯・勝目窯・永井窯は、いずれも「休窯状態」にあった。ここで言う「休窯」とは、おそらくは当時の平佐の人々の認識であり、必ずしも「閉窯」を意味するわけではないが、同時に生産が再開されたことを保証するものでもない。

ところで平佐焼全体の生産動向を知る上で、「鹿児島県勸業年報」「鹿児島県統計書」などの統計資料が手がかりとなる。ここでは長期間把握できる「鹿児島県統計書」（以下、「統計書」と略称）における平佐焼の生産動向を整理したい⁵⁾。なお「統計書」における平佐焼に関する記録は、明治 21 年（1888）から昭和 5 年（1930）までであり、「統計書」そのものは昭和 14 年分まで刊行されているが（刊行は昭和 16 年）、昭和 6 年以後、平佐焼に関する記述は見えない。このことは、昭和 9 年の「休窯」という認識とは別に、外部的には昭和 5 年でもって産業としての磁器生産は停止したとみなされていた可能性を示している。その点、先述の昭和 7～12 年における平佐焼合資会社の活動がなぜ反映されていないのか疑問として残るが、今のところ手がかりはない。

まず生産額の推移を見ると、明治 39～大正 4 年（1906-1915）の間にピークを持つ増加と減少という傾向が見て取れる（図 3）。しかし、同時期の県内陶磁器生産額における平佐焼の占める比率の推移では、一貫して右下がりの減少である。平佐焼の生産額増加以上に県内陶磁器生産額の増加が顕著であったことを示している⁶⁾。このことは生産額の増減にかかわらず、明治 21 年以後の平佐焼生産が衰退していったことを示している。

製造戸数と職工数の推移では、当然のことであるが、両者は連動する状況が見て取れる（表 1）。製造戸数が 6 戸と最も多い時期において、職工数も 48 人と最多である（明治 32-34 年、1899-1901）。その後、製造戸数 4 戸、2 戸、1 戸と減少するとともに職工数も急激に減少していく。窯数は 4 基（明治 29-31 年、1896-98）から 6 基（明治 32-42 年、1899-1909）となり最多となるが、その後、明治 44 年（1911）に 2

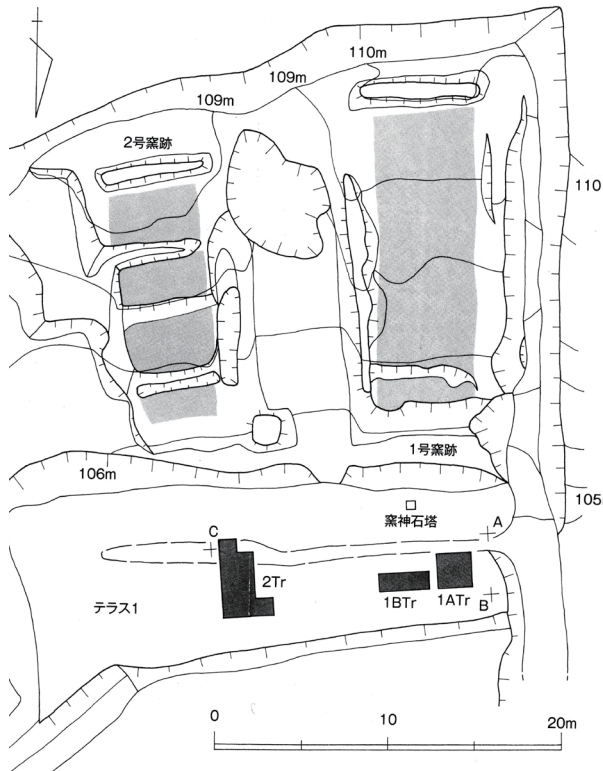


図4 南京皿山窯跡測量図（渡辺・金田 2012 より）

基と急減し、大正14年（1925）には1基となる。それに応じて室数も増減するが、明治44～大正4年（1911-15）において窯数が6基から2基に減っても室数が25室と変わらないのはやや不自然であり、誤記の可能性もある。

以上、「統計書」から近代平佐焼窯場の生産動向を整理した。その結果から読み取れることとして、まず生産額に増減はあるものの、県内生産額比率は一貫して下降しており、生産の衰退状況が看取される。また製造戸数・職人数・窯数・室数の推移から、大正時代に入ると、いずれも急速に減少しており、生産額の低迷と連動すると言える。そして少なくとも昭和6年（1931）以後は、統計調査の対象とならないほど生産が減少していたことが想像される。さらに平佐焼窯場には複数の製造戸および窯があり、それらはある時期に一斉に操業を停止したわけではなく、段階的に操業を停止していった過程が読み取れる。しかし現在窯跡として確認できる各窯の閉窯が、具体的にどのように対応するか知るためには、より詳細な資料調査が必要である。

一方、昭和9年段階で平佐の人々は生産停止の状況を「休窯」と認識していた可能性がある。想像であるが、

再開のための窯や道具のメンテナンスも継続していたかもしれない。しかしこの時期すでに「統計書」には記載が見られず、その後も再び現れることはない。「平佐焼合資会社」のような一時的な生産はあったとしても、おそらく太平洋戦争の激化などにより、ある段階で操業が完全に放棄されたと推測される。つまり「閉窯」に至るまで、「生産の停止」→「休窯という認識」→「完全放棄」という時期差を有したプロセスがあったことが想定できる。その場合、ある窯場が「閉窯した」とは、どの段階を呼ぶのか、慎重な検討が必要であろう。

II. 苗代川南京皿山窯・御定式窯

苗代川（日置市美山）は17世紀初頭から朝鮮陶工たちによって陶器生産が始まった窯場であり、近世を通じて、甕や壺、摺鉢、土瓶などの日用陶器の生産が主体であった。19世紀に入ると、薩摩藩の殖産興業策の一環として色絵陶器と磁器の生産が始まる。そのうち磁器を生産したのが、弘化3年（1846）に開窯した南京皿山窯である。窯跡には南北方向に2基の連房式登窯跡が並列して残っている（図4）[渡辺・金田 2012]。

南京皿山窯の閉窯年代について記した同時代資料は管見に触れていない。ただし明治17年（1884）5月3日付けの沈壽官家文書に「旧南京山焼物所跡」という文言が出てくることから、この時点ですでに閉窯していたと推測される[渡辺 2007: 124 頁]。またこれまでの同窯跡調査によれば、基本的にコバルト染付は生産していないようである。窯跡周辺にわずかに散布するものの、後述するように、隣接する御定式窯でコバルト染付を焼いているので混入の可能性がある。苗代川におけるコバルトの導入時期ははっきりしないが、導入以前の閉窯が考えられる。先述したように平佐では遅くとも明治10年頃には使われていた。南京皿山窯は薩摩藩からかなり手厚い保護を受けていた窯と考えられることから[深港 2002]、明治4年（1871）の廃藩置県は大きな打撃となったであろう。以上から南京皿山窯は明治一桁年代には閉窯したと推測される。

南京皿山窯跡のほかに磁器が採集される窯跡として御定式窯跡がある（図5）。南京皿山窯跡の西北部に近接して所在し、2基の連房式登窯跡が並列してい

る。同窯跡物原ではコバルト染付が採集されている〔田澤・小山 1941 : 189 頁〕。つまり閉窯はコバルト染付導入以後であろう。また同窯跡で採集された「管形磁製品」（「馬のしりがい」の部品）は、明治 14 年（1881）の第 2 回内国勸業博覧会に沈壽官により出品された「馬尾掛管」を指すと推測されることから、この時点までは磁器を生産していた可能性がある〔渡辺 2009〕。

一方、明治 20 年からの「鹿児島県勸業年報」「鹿児島県統計書」を見ると、苗代川の陶磁器生産額を示すと考えられる「日置郡」や「苗代川」の項目に、陶器生産額は記載されているが、磁器のそれはない〔渡辺 2001a・b, 2002〕。御定式窯跡では陶器も採集されるので、磁器生産の終焉をもって同窯の閉窯とは必ずしも言えない。ただし、少なくとも統計資料に記載されるような「産業」としての磁器生産は、苗代川においては明治 20 年代にはすでになく、同 10 年代後半には終息していた可能性が高いと思われる。

以上から、苗代川における磁器生産は、明治一桁年代における南京皿山窯の閉窯後、隣接する御定式窯跡において引き継がれた可能性があるが、それも遅くとも明治 10 年代後半には終息していたと推測されよう。



図 5 御定式窯跡（筆者撮影）

Ⅲ. 日木山窯

日木山窯（始良市加治木町）は万延元年（1860）、加治木島津家の保護の下に開窯された磁器窯である。開窯・操業にあたっては、苗代川と平佐の磁器職人が招致されている。この窯の閉窯年代については、同窯跡を発掘調査し、報告した関一之により詳細な検討がなされている〔関編 2005〕。ここではそれを整理するに留めたい。

日木山窯は明治 4 年の廃藩置県によって大打撃を受け、その後、「犬童英輔」という実業家が経営を継承したが、「幾程も経たず廃絶に帰した」とされている。関は、この「幾程」の期間がどれくらいであったかを、犬童英輔の経歴を参照しながら検討している。その結果、具体的な経営期間については特定できなかったものの、発掘調査の結果、コバルト染付などが出土していないことも考えあわせて、「日木山窯全体の操業期間の中では生産量や市場流通量等、影響を及ぼすものではない」と評価している。廃藩置県後、犬童英輔が経営を引き受けたものの、ごく短期間でその操業を停止したと推測される〔前掲 71-73 頁〕。

Ⅳ. 磯窯

磯窯（鹿児島市）は、幕末の薩摩藩主・島津斉彬が興した近代工業化政策・集成館事業の一環として、現在の鹿児島市磯庭園内の一角に開窯された。現在同地点はレストランが建っているが、安政 4 年（1857）の『薩州鹿児島見取絵図』の描写から、焼成室 10～11 室の連房式登窯であったことがわかる（図 6）。その主たる製品は、隣接して建造された反射炉の構築材として用いられる耐火レンガと考えられるが、窯跡所在推定地からは焼成不良の磁器片も採集されており、磁器を生産していたことは確実である。また苗代川の陶工・朴正官が同地で色絵技術の開発に従事したことが伝えられていることから、色絵陶器の生産も試みられていた可能性がある〔渡辺 2006b〕。

磯窯の操業年代については、一般に安政 2 年（1855）6 月に開窯し、文久 3 年（1863）の薩英戦争の際に磯一帯が灰燼に帰し、閉窯したとされている〔田澤・小山 1941 : 138, 306 頁など〕。一方、前田幾千代は開窯を嘉永 6 年（1853）、閉窯を文久 3 年としていたが〔前田 1934 : 444 頁〕、その後、安政 5 年（1858）に閉窯したと意見を変えている〔前田 1941 : 106 頁〕。以上の諸見解は、いずれもいかなる同時代史料に基づいたものかが提示されていない。現段階では『薩州鹿児島見取絵図』の元となった安政 4 年 7 月の見聞段階が定点のひとつとして押さえられるにとどまる。それを踏まえて筆者はかつて安政年間（1854-59）を主たる操業期間と推定した〔渡辺 2006b〕。

ところがこれまで考えられてきた上記の年代観とは異なる記録がある。ドイツ人地理学者リヒトホーフェ

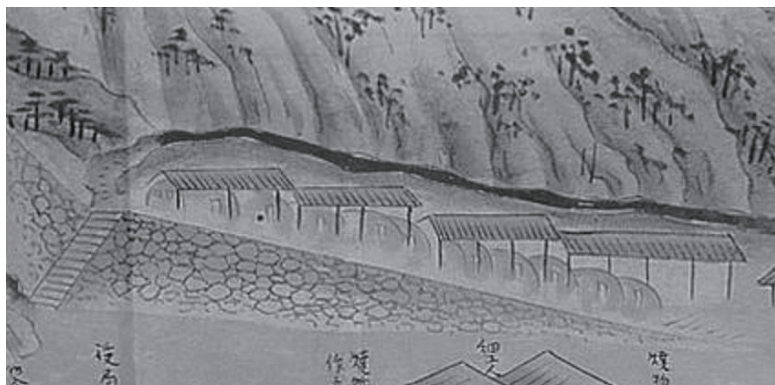


図6『薩州鹿兒島見取絵図』の礮窯（武雄市図書館・歴史資料館蔵）

ンは、1860-61年と1870-71年の二度にわたって来日しており、後者の来日の際には鹿児島も来訪している。鹿児島には1871年2月4日から19日（太陽暦）まで滞在し、2月8・9日（明治3年12月19・20日）に「礮の工場」を訪れている。これは島津久光らによって開始された第2期集成館の工場である。その中で2月9日に「磁器工場」を訪れたと記述されている〔リヒトホーフエン（上村訳）2013：196-197頁〕。窯は「原理的には尾張のそれと同じ」で「一番下の炉以外は全く同じ大きさの八つの火室から成っていて、それぞれが長さ約八フィート（約2.8m）、幅七フィート（約2.45m）、高さ六フィート（約2.1m）であって丸天井になっていて、最良の耐火レンガで作られている」（（ ）内のメートルは渡辺追記）とあり、8焼成室より成る連房式登窯と考えられる。また、いくつかの「大きな焼き物を作るときに用いる特別な窯」や「薪を前もって乾燥しておくのに特別な窯」⁷⁾などもあったとしている。ただし「黄色い罫焼き陶器」を生産したとあることから、陶器生産が主体であったようだ。しかし一方で「白い陶磁器に専ら塗られるのは安っぽい青の染料は中国から輸入したもの」を用いたとの記述もあり、染付の生産も想像される。

この「磁器工場」が斉彬時代の礮窯を引き続いて使用していたものなのか⁸⁾、また礮窯と同様に磁器を焼成していたかどうかについては、現段階では不明である。しかし礮窯が斉彬の死後も継続的あるいは断続的に陶磁器生産をしていた可能性も含め、今後検討を要するであろう。なお礮一帯の工場群は、廃藩置県後、明治政府に引き継がれるが、明治10年の西南戦争で焼失したことから、この「磁器工場」も同じ運命をたどったと想像される。

おわりに

以上、近世後期から始まった「薩摩磁器」生産の終焉をめぐる、4つの窯場について検討してきた。うち薩摩藩の殖産興業策で保護の厚かった苗代川、加治木島津家の保護による日木山窯は、ともに明治4年の廃藩置県を契機として、急速に磁器生産を縮小、放棄していることが指摘できる。このことは薩摩藩の磁器生産が、藩などの保護の下に成立し、それゆえに生産が可能であったということの裏返しでもあったと言える。また礮窯については、はたして磁器生産を継続していたかどうか、より詳しい検討が必要であるが、陶器であれ磁器であれ、明治10年の西南戦争で終焉を迎えた可能性が考えられる。

その中で平佐焼窯場のみは、廃藩置県後も民間経営の窯場として、少なくとも昭和初期まで継続していた。しかし「統計書」の記録から、その生産が下降線をたどっていたことは否めない。平佐焼衰退の原因については、しばしば明治初期に海外輸出を試み、長崎に製品を出荷したが、火災で焼失してしまったことが挙げられる（「沿革」など）。しかしたとえそれが大きな打撃であったとしても、その後、約半世紀にわたって生産を継続していることから、それだけが要因とは考えにくい。むしろ薩摩藩による藩外産磁器の流入規制〔深港2002 p.41〕が失われ、肥前や瀬戸など大規模窯業地からの安価な磁器の流入による影響の方が、より大きかったのではないかと考えられる。

本稿では、「薩摩磁器」の衰退・終焉について検討してきた。これまで述べてきたように、ある窯の開窯年代に関する情報に比べると、閉窯年代のそれは少ない。また平佐焼のところでも指摘したように、いつの時点をもって「閉窯」と呼ぶかは判断が難しい場合もある。しかしひとつの窯場が開かれ、それがいつ閉じたのか、その二つの年代を押さえ、その期間中の生産動向を把握することは、産業としての窯業の具体相を明らかにする上で、重要であることは言うまでもない。注目されやすい開始期・盛行期だけでなく、衰退期・終焉期の検討の必要性を指摘して、擱筆したい。

2015年8月15日 稿了

注

- 1) 明治18年に「皿山磁器製造所沿革」、明治19年に「磁器製造所由緒」という平佐焼に関する書類が作成され、『薩陶製菟録』（鹿児島県立図書館蔵）にその写本が収録されている。本稿では前者を「沿革」、後者を「由緒」と略称する。
- 2) 瀬島熊助は鹿児島市田之浦窯の経営者として、農務局工務局1886にその名が出てくる。
- 3) 平佐焼における鼈甲焼は、安政5年（1858）の墨書銘資料〔渡辺2003：48頁など〕から幕末期にはすでに生産が開始されていたと考えられ、また明治18・19年の「沿革」「由緒」の中でも平佐焼の一種として挙げられている。向井勘兵衛の鼈甲焼はその技法を受け継いだものである。
- 4) 田澤・小山1941では「大窯」と表記されているが（203頁）、現窯を指すと考えられる。
- 5) 「鹿児島県統計書」記載の平佐焼に関する情報は、川内市歴史資料館編2000に掲載されている「統計平佐焼」（48-53頁）および渡辺2001a・b、2002による。
- 6) ただしこの時期、鹿児島県内の陶磁器生産額もまた、全国の生産額全体の中でその比率を急速に減少させていく〔渡辺2002：61頁〕。
- 7) 大きな製品ののための特別な窯とは、大花瓶などを焼く絵付け窯（錦窯）の可能性が考えられる。また薪乾燥用の窯は佐賀県有田における「乾（こ）かし窯」のようなものであろう〔有田町史編纂委員会編1985：207-210頁〕。
- 8) 『薩州鹿児島見取絵図』における磯窯は10～11焼成室と推測されるのに対し、リヒトホーフエンは8焼成室と記述している点、齟齬がある。しかし龍門司古窯（始良市加治木町）のように後尾の焼成室を壊して窯体を小型化する事例も見られるので、磯窯でも同様のことが行われた可能性は否定できない。

参考文献

- 有田町史編纂委員会編 1985『有田町史 陶業編Ⅰ』有田町。
- 岩満重 1967『平佐やき雑記』私家版。
- 関一之編 2005『日木山窯跡』加治木町教育委員会（現始良市）。
- 川内郷土史編さん委員会編 1976『川内市史』川内市。
- 川内市歴史資料館編 2000『用と美—平佐焼の世界』展図録，川内市歴史資料館（現薩摩川内市）。
- 大日本窯業協会編 1914『日本近世窯業史』（柏書房復刻1991『日本窯業 史総説』5巻）。

- 田沢金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所。
- 農務局工務局 1886『府県陶器沿革陶工伝統誌』（龍溪書舎復刻1994『明治後期産業発達史資料』187巻）。
- 野元堅一郎 1982「薩摩」『日本やきもの集成12』123-131頁，平凡社。
- 野元堅一郎 1984『薩摩焼年表』鹿児島県歴史資料センター黎明館。
- 深港恭子 2002「弘化から嘉永年間の苗代川における焼物生産について」『黎明館調査研究報告』15，27-41頁。
- 福藺美由紀 2009「明治十年九月」銘のある平佐焼碗—平佐焼におけるコバルト顔料使用開始時期について—『からから』25，1-3頁。
- 前田幾千代 1934『薩摩焼総鑑』（思文閣復刻1976『陶器全集』第3巻）。
- 前田幾千代 1941「薩摩焼異聞（終）」『茶わん』131，97-107頁。
- 向田民夫 1978『日本の陶磁9 薩摩』保育社カラーブックス。
- リヒトホーフエン、フェルディナンド・フォン（上村直己訳）2013『リヒトホーフエン日本滞在記—ドイツ人地理学者が観た幕末明治—』九州大学出版会。
- 渡辺芳郎 2001a「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産（1）—『鹿児島県勸業年報』『鹿児島県統計書』から—」『鹿児島大学法文学部 人文学科論集』第53号，61-92頁。
- 渡辺芳郎 2001b「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産（2）—『鹿児島県勸業年報』『鹿児島県統計書』から—」『鹿児島大学法文学部 人文学科論集』第54号，85-114頁。
- 渡辺芳郎 2002「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産（3）—『鹿児島県勸業年報』『鹿児島県統計書』から—」『鹿児島大学法文学部 人文学科論集』第55号，57-93頁。
- 渡辺芳郎 2003『日本のやきもの 薩摩』淡交社。
- 渡辺芳郎 2006a「江戸時代後期における薩摩磁器の生産と流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通—第16回九州近世陶磁学会資料集』52-93頁，九州近世陶磁学会。
- 渡辺芳郎 2006b「磯窯考—集成館事業における在来窯業の役割—」『近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置づけに関する総合的研究』（平成16・17年度科学研究費補助金（特定領域研究（2））報告書）103-116頁，薩摩のものづくり研究会。
- 渡辺芳郎 2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』

鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室.

渡辺芳郎 2009 「「器」以外の「薩摩焼」－糸巻形・管形磁製品について－」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集－』下巻, 41-49 頁, 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会.

渡辺芳郎・金田明大 2012 『考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究』平成 21 ～ 23 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）研究成果報告書, 鹿児島大学法文学部.